

恋の途中

壹岐和代

東京都・二三・アルバイト

今でも覚えています。

私達が別れたのは丁度、桜が咲き始めた春の夜でしたね。ぼつんとたたずむ電灯の光で散っていくピンクの花びらがきらきら舞ってたのをまだ失恋の実感もわかずに見とれていました。あの日から私の感情は絶えず上下に揺れてて自分の機嫌さえもわからず、心をコントロールする事も難しかった毎日でした。

だけど私が冷静になってあなたとの思い出をさかのぼった時、わかりました。

そしてあなたの優しさや愛を失った後にまた、深くわかった時、それまでにならない、別の涙が流れました。

私はとても独りよがりで勝手だったのかもしれない。あなたと恋人同士だったのにもかわからず、自分の進むべき道が定まらず、私の存在がよくわからなかったんです。その度にあなたにしがみついて、頼って自分で歩こうとしてなかった。私は自分で精一杯でした。それがあなたにはどんな風に映ってたのか、きっと私は上の空でつき合ってる

と思われてたかもしれないです。私が悩みを言わなかったのは自分の問題で、問題の題名すら、原因すらわかっていなかったからなんです。それでもあなたは沢山の愛をくれて、一緒に泣いてくれた事を私は何度も無駄にしたのですね。あなたとの恋を失った後に私の生活の中であなたが助けてくれた部分を一人で越えようとする度に私は思いました。あなたが知っている、不細工な私を追い越そうと。この言葉が今は無意味になろうとも、あなたに伝えたいのです。私はあなたを愛していました。あなたに偽りなど一瞬たりともありませんでした。ただ、孤独の果てで私の世界があまりにも印象的に押し寄せて来た、恋の途中だったのです。

その吹雪の中で隣にいてくれた事をありがとう。